

9 体 育 科

秋本篤志・佐藤直美・今村昌禎

1 研究テーマについて

(1) 「自立に向かう子どもたち」の姿 〈3つの『り』〉

- ① **運動へのこだわり** = 自分の心と体を見つめ、受け身ではなく、運動にこだわりをもって（＝自主的な問題 解決能力）（没頭して）取り組み、主体的に課題を追究している姿。
- ② **仲間とのかかわり** = 仲間の演技や動きに励ましやアドバイスを送ったり、仲間との話し合いの中で、問題や課題を解決したりして、共に運動自体を楽しみ、高まり合おうとしている姿。（＝豊かな人間性）
- ③ **生活への広が** = 自分の心と体を見つめ、学習した事柄を生活スポーツとして、ふだん（＝たくましく生きるための健康や運動）の暮らしの中に、積極的に生かしている姿。

(2) サブテーマ「人やものとかかわることを大切に」のとらえ

サブテーマには、人やものにかかわることによって…

- ① 問いや気づきが生まれ、意欲が高まる。
- ② 自分だけでは気づかないことに目を向けたり、自分の考えを深めたり、修正したりしながら、主体的に運動する態度や問題解決能力を身につけていく。
- ③ 身につけた力が集団の中で生かされ認められることで、子どもは自己の存在に自信をもち、自分らしさをもっと追究していく。

ということが含まれている。そこで、体育科の学習において、3つの「かかわり」を大切にした学習に取り組んでいく必要があると考えた。

① 学習者と運動とのかかわり

- ◇ 運動するときの心（＝動きの感情）を大切にする。「自分の体との対話」
- ◇ 子どもの実態を十分にふまえた年間カリキュラムづくり・教材選び
- ◇ 運動の特性（＝運動の楽しさ）を味わえる出会わせ方・課題設定・活動時間の保障

② 学習者と仲間・教師とのかかわり

- ◇ 一人一人がみんな違うという認め合いから出発し、共に楽しむために体験を通して学習を創り上げる。
- ◇ 誰もが自由に意見が言い合え、出された意見をみんなが受け入れ、共に活動するやわらかな雰囲気づくり。（教え合い、励まし合い、認め合い、思いやり）

③ 学習者と自分自身とのかかわり

- ◇ 自分らしさを見つめ、表現できる場や時間の保障。
- ◇ 運動と自分、仲間と自分を見つめ続けるふりかえり。

2 基本的な考え方について

体育は、運動の特性を味わう上で、人間関係が大きく左右する教科である。グループやチームの人間関係によって、運動の特性に関係なく、好きになったり、嫌いになったりもする。つまり、肯定的にとらえると、運動を通して、より望ましい人間関係を築き上げることのできる教科であるといえる。

また、生涯に渡って、運動・スポーツにかかわり、より豊かで健康的な生活を築いていくための基礎を培うという社会的役割を担っている教科でもある。それを自負して教科学習にあたりたい。

(1) 運動・スポーツを通して豊かな人間性を育む

競争スポーツが生活文化として確立するには、優劣の秩序化や相手を打ち負かすところに意味が置かれるのではなく、勝者も敗者も、強者も弱者も互いに認め合い、しかも、それぞれのよいところや個性を存分に発揮し、高め合うことの意味や価値をみんなに共有されることが必要であると考ええる。「人を思いやる気持ち」「互いを認め合う気持ち」を根底にした自己実現の在り方を追究していきたい。

(2) 運動の学び方(=生活に結びついた「使える」問題解決力)の習得を図る

生涯体育・スポーツの実践力は、子どもが主体的に運動に取り組むなかで育まれると考える。子どもがこだわりをもって運動に取り組み、実感を伴って納得するという過程が重視されるべきであろう。また、学び方を習得していくことは、学んだことを生活に生かそうとする力として、必要ではないかと考える。

3 授業づくりにおけるポイント

(1) 子どもの願い・欲求を満たす「運動との出会わせ方」

- ◇ 運動自体の心地よさを味わう場を大切にする。
- ◇ 子どもの実態を把握し、子どもの願い・欲求を満たすという側面を大切にしながら、教師が教えたいこと・気づかせたい価値に結びつけて、授業の方向づけを図る。
- ◇ 学習意欲の継続や学習の見通しをもつために、目標の明確化を図る。

(2) 自分なりに発展しやすい「学習課題の設定」

- ◇ 具体的な手だてが見つかる、達成の可能性がある自分なりの学習課題をつくれるように導く。(授業前・授業中)
- ◇ 自分の運動(学習課題)がどうだったか一つ一つ記録させ、次のやりたい運動(学習課題)が見つけられるようにする。

(3) 自己決定できる「場」や課題解決のための「活動時間の保障」

- ◇ 自分にとって、何が、どれが効果的なのか、自分の体で試して納得する授業過程を設定する。
- ◇ ある程度運動のしくみやゲームの方法が分かったら、自分なりに考えた方法(運動づくり・ルールづくり)を試す場や課題解決のための時間を保障する。

(4) 学び合い、高まり合う「集団づくり」

- ◇ 学習材に応じたグループを組織したり、チームを編成したりする。
- ◇ 個の違いやよさを認め合い、互いに思いやれるやわらかな雰囲気づくりに努める。

(5) 個人内の伸び、集団内のかかわりをみとる「評価」

- ◇ 「できばえ」に対する評価を「自己実現」という視点から行い、昨日の自分より今日の自分というように、個人の中での向上に喜びを感じることができるよう働きかけを行う。
- ◇ 集団(グループやチーム)内のかかわりが、喜びや成果としてみとれる評価を工夫する。

4 成果と課題 —「人やものとかかわることを大切に」から— (◇=成果, ◆=課題)

(1) 学習者と運動とのかかわり

- ◇ 「みんなが楽しめるものを創ろう」という観点を大切にして学習者自身が授業を創るようにし向けていくことで、自ら運動へのこだわりを持って活動していた。
- ◇ 見つけ出した運動技能を高めるコツを、学習者全体に紹介する場を設けることにより、自分に合ったコツを自らいろいろと試す姿が見られた。
- ◆ 運動へのこだわりを持って活動するようになってきたが、見つけ出したコツなどを身につけるまでの時間の保障が十分になされていなく、「分かる」と「できる」が十分に統合されていない。2時間続きの学習時間やゆとりのある年間カリキュラムづくりをしていく必要がある。
- ◆ ふり返りの場や時間の確保が十分にできていない。一時間の始めにめあてをしっかりと持つことやふり返りの視点を明確にして、毎時間短いながらもふり返りの場を積み重ねていくことを大切にしていきたい。
- ◆ 「自分との体の対話」をする視点をもっと明らかにしていかないと、運動自体を楽しむ自分に気づきにくくなっている。

(2) 学習者と仲間・教師とのかかわり

- ◇ ボール運動などで、チームで協力し合い勝つために、仲間のすてきな姿を認める場を設けていくと、互いの違いをプラス思考で認めながら学習を深めていった。
(「仲間やチームのキラリと輝く姿を見つけよう」など)
- ◇ 時間を設定したり学習ノートを利用したりすることで、作戦やコツを考える場を保障していくことで、互いの違う考えや観点を受け入れる雰囲気が出てきた。
- ◇ 仲間どうしで教え合う場を設けることで、得意な学習者は、自分の身につけているコツを伝えることでより深まっていた。苦手な学習者は、学習者の視線になった支援を受けられるので、スムーズにコツを受け入れることができるようであった。
- ◇ ふり返りの場を設けることで、自分や仲間の前時との違いや高まった点に気づき合うことができていた。
- ◇ 一輪車やリズムなわとびなどは、仲間の技の影響を受けてか、休憩時間にも取り組む姿がよく見られた。
- ◆ 自然に仲間どうしで高まり合っているように、休憩時間や自由活動時間にも学習に取り組むことができる環境づくり(運動する場や用具)をしていく必要がある。
- ◆ 「学習者と仲間・教師とのかかわり」の系統性(目標や課題)を明らかにしていき、学習に応じた支援ができるようにしていく必要がある。

(3) 学習者と自分自身とのかかわり

- ◇ 学習者自身や仲間のすてきな姿を認める場(ふり返りなど)を設けることにより、自分の課題を明らかにすることができ、次への活動に活かそうとしていた。
- ◆ 苦手意識を持っている学習者を前向きな気持ちにするようにするためには、やはり運動に対して一つ一つ自信を持たせるしかない。そのために教師の細かで継続的な支援と、運動との出会わせ方の工夫が必要である。

参考文献

- 1) 細江 文利, 『子どもの心を開くこれからの体育授業』, 大修館書店, 1999
- 2) 永島 惇正, 『なぜ, いま, 関わり合いを大切にするのか』, 学校体育4月, 2000, 日本体育社